幼年教育研究年報　第28巻　99－107
The Annual Research on Early Childhood, 2006

子育て研究の動向と展望

朴　　信永・杉村伸一郎

A Review of Child-rearing Studies

Shin-Young Park, Shinichiro Sugimura

Under the theme of child-rearing, research on child-rearing attitude of parents represents both starting and finishing points of child-rearing research. Taking this into consideration, this study intentionally starts with the research on child-rearing attitude of parents, which is accepted as a tradition, in order to survey recent studies, focusing on the factors which determine child-rearing attitudes, for the purpose of finding out new aspects for child-rearing support. It is assumed that parent's perspective on child-rearing behavior as well as cognition and emotion in association with such child-rearing behavior play important roles in deliberating on child-rearing support. Nevertheless, the findings of this study show few studies examine such perspectives. Issues in studying cognition of child-rearing and meta-cognition are discussed for future studies.

Key Words : child-rearing attitude, child-rearing cognition, child-rearing support

親の養育態度が子どもの発達に極めて重要な役割を果たすことが，数多くの実証的研究により示されてきた。従来の親子関係に関する研究では，親のことがもっぱら子どもの発達の規定因として位置づけられてきたが（大日向，1991），その後，親子の相互作用に関する研究も増加し，子どもから親への影響も相当あることが明らかになりつつある。そして，子育てに不安やストレスを感じる親のために様々な支援が行われ，親としての発達に関する研究も行われるようになった。

このように親子関係や子育てに関する研究は，すそのを広げてきたが，これらの研究が最終的に至るところは，親の養育態度ではないだろうか。なぜならば，たとえ子ども観や育児観，親としての意識などが変化したとしても，また，一時的に育児不安やストレスが低下したり育児効力感が高くなったとしても，養育態度が変化しない限り育児ストレスの根本的な解決に至らないと思われるからである。

子育てというテーマにおいて親の養育態度に関する研究は，子育て研究の出発点であると同時に到着点であると考えられる。本稿ではこのことを念頭におきながら，あえて伝統的とみなされている親の養育態度に関する研究から出発し，養育態度を規定する要因という観点から最近の子育て研究を概観することにより，子育て支援に対する新しい視点を見出すことを目的とする。

1．親の養育態度の影響

親の養育態度の類型化に関しては，数多くの研究が行われてきた。一番広く知られているSymonds（1937）では，両親の養育態度を‘受容－拒否’と‘支配－服従’という2つの次元を用いて分類した。その後も，親の養育態度が子どもの発達にどのような影響を及ぼすのかについて様々な研究が洋の東西を問わず行われて

1　広島大学大学院教育学研究科博士後期課程
2　広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

きた。

Schaefer, Bell and Bayley (1959) は，‘愛情－憎悪’，‘自律－統制’という2つの次元からなっていて，愛情深く自律的な養育態度が幼児の発達に最も望ましいと結論付けた。Williams and Scott (1953) は，子どもの成熟要因であるとされていた運動能力でさえ母親の養育態度によるということを示し，Holden (1983) は，子どもが望ましくない行動に臨む前に，注意を別方向に向けるといった予防的な育児スキルを用いる母親の子どもは望ましくない行動を示すことが少ないことを見出した。また，津守・稲毛 (1958) は，寛容的な養育態度をもつ親の子どもは精神発達がすぐれることを，津守・稲毛 (1960) は，親の養育態度が子どもの依存性，従順性に影響することを明らかにし，子どもの発達は親の養育態度を反映したものであると考えられていた。

当時のこのような養育態度研究に関して，親の個々の細かな態度が子どものどのような特徴を形成するのかについての知見は必ずしも一致していないという指摘もある (戸田，1996)。しかし，1990年以前の子育て研究では，主に「親から子へ」の研究がなされ，「子から親へ」の研究や親子双方の視点からの研究は数少なく，親の養育態度が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究はその後も子育て研究の主流を成すこととなる。

現時点の動向を改めて把握するために，1990年代から現在に至るまでの子育てに関する研究を集めたところ，最も多いのは親の養育態度に関する研究であった。その中では因子分析を用いて養育態度の種類を分け，それらが子どもの発達へ及ぼす影響を検討している研究が多い。近年は，養育態度と親子間の心理的距離との関係 (猪野・高橋・寺津・星，2000) や，養育態度が子どもの行動特徴に及ぼす影響 (太田・古田，2002) など，より多面的に子どもへの影響を捉える研究が行われている。以下，最近の研究を詳しく紹介する。

中台・金山 (2004) は，母親の養育態度 (受容・過保護) が幼児の社会的スキル (主張・自己統制・協調) に及ぼす影響について，幼稚園児とその保護者および保育者を対象に質問紙調査を行った。その結果，母親の養育態度→家庭における幼児の社会的スキル→園における幼児の社会的スキル，というプロセスが示された。また，岡野・衣田 (2005) では，母親への質問紙調査を通して母親の養護性と幼児の自己制御機能との関連を調べたところ，養護性を十分に身につけている母親の場合，その子どもは環境と主体的に関わろうとし自分らしく行動する傾向がみられた。さらに，このような関係について場面画に対する子どもの反応を手がかりにした実験の結果，母親の養護性得点の高い群の子どもは，臆することなく自発的に多様な回答を述べる傾向があり，それはときには自己主張と結びつく場合もあることがわかった (衣田・岡野，2005)。

以上のように，子どもの人格形成や発達にとって重要な役割を果たすと考えられる親子関係のあり方や親子の相互作用の質を規定する因子として，親の養育態度に関する研究が進められてきたが，一義的な因果関係を見出すことは難しい。むしろ，養育者と子どもとの双方的な影響関係に関する理解が必要とされる中，同じ養育態度であっても，受け入れる子ども側の変数によって影響は異なってくるという議論が，親子の相互関係に注目を集めるきっかけとなった。特に，親の叱りことばの受容過程における子どもの状況認知の役割 (藤田・丸野，1992)，子どもの受けとめ方 (永山・金光，1999) に関する研究などにより，子どもが親の養育態度をどう受けとめるかは親子関係に基づいていることが明らかにされてきた。さらに，松田・児島 (2003) では，親の用いる叱りことばをいくつかのタイプに分類し，子どもに受容されやすい叱り方とその過程に関して，小学校5・6年生を対象に質問紙調査を行った。その結果，「人格評価」や「突き放し」といった叱り方は子どもに反発感情を生じさせるが，親との信頼関係の有無が重要な媒介変数であることがわかった。

さらに，子どもの認知に加えて，子どもが親に示す行動を親自身がどのように認知しているかという親子間の相互認知構造に関する研究 (小高，1994) もいくつか行われている。たとえば，子どもの社会的特性に関する母子の認知に関する研究では，「親による認知」「親による認知に関する子どもの認知」「子どもの自己認知」という3つの認知間の差異の様相が親子関係の特徴によって異なるということが示唆された (小松，1999)。また，幼児をもっている母親の自己認知に関する研究では，母親が子どもの要求を認めないとき，母親は「なぜ」認めないかに注目するのに対し，幼児は「何を」認めないかに注目することが明らかになった (古市，

2002)。

親のあり方を模索するのに，親子の相互関係や認知のズレに関する理解は欠かせないと考えられる。親はどのようなときに，子どもと自分の認知差に気づくのであろうか。親子双方にみられるこのような認知に関する研究は，親子のコミュニケーションだけでなく，親が子どもをしつける上でもためになるであろう。以上のような親の認知面における子育て支援が今後より求められると思われる。

2．親の養育態度を規定する要因

親の態度，言語，行動などが極めて重要な役割を果たすことが明らかになるにつれて，それらを規定する要因に注目が集まるようになった。また，親とかかわりをもったり，相談にのったりする際には，最初に親の養育態度を把握することが重要であると主張されている(嶋崎，2003)。親の養育態度とその形成要因を明らかにすることにより，親子関係における問題の解決を図るのである。

母親の養育態度に影響を及ぼすと考えられる要因は数多くある。たとえば，田淵（1993）は，過去の要因として，親自身の出生順位，学歴，親から受けたしつけの認知が関係し，現在の要因として，パーソナリティ，夫との関係，子どもの出生順位，就労意識と現実とのズレ，性役割観が関係することを見出した。森下・木村（2004）は，内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートが養育態度に影響を及ぼすことを示している。また，堀口（2005）は，5歳児をもつ夫婦の養育態度と夫婦関係を調べ，夫婦が不仲であると子どもに温かい受容的な態度で接することが少なくなり，ことばの暴力や無視する行為など，子どもへの厳しいしつけや心理的な虐待の傾向が強まることを明らかにしている。

1）子どもや育児に対する考え方および親意識

以上のような研究の傍ら，実際に子育てを行うことが親にとってどのような意味をもち，その親意識の形成と変容を実証的に明らかにした研究は極めて乏しいという指摘もあり（牧野・中原，1990），親の養育態度の背後にある子ども観や育児観，価値観などが検討されるようになってきた。近年，子どもを産み，育てることに関して，授かることからつくることというように選択性がより積極的な意味をもつようになり（柏木，2001；中山，1992），育児に対する考え方も変化している。親がもっている子どもや育児に対する考え方によって親行動(parenting）のスタイルが決まるなら，まずそれらについて明らかにする必要がある。

藤本・小堀・鈴木・鎌倉・糸井（2003）の研究は，母親の養育態度に影響する要因として子ども観に着目し，本来母親が認知している子ども観は，母親の子どもに対するイメージであり，比較的安定した内的作業モデル（表象モデル）として働き続けると述べた。また，尾崎（2002）は，幼児をもつ母親・父親に回答を求め，4タイプの養育態度（拒否的，支配的，保護的，服従的）を目的変数とし，親意識の3因子（親役割安定感，子ども優先，親子心通い合い）と，パーソナリティの2因子（自律性，親和性）を予測変数として重回帰分析を行った。その結果，養育態度と親意識，養育態度とパーソナリティの間に高い関連性が示された。

2）親となる発達的変化および子育てにともなうアイデンティティの変化

子ども観や育児観，親意識に関する問題をもう少し幅広く長期的な観点から取り上げているのが，親としての発達に関する研究である。親としての発達的変化をたどってみることは以下のような必要性から行われてきた。

①少子化・核家族化など社会的状況の変化は，養育態度や育児スキルなどを形成していく親になる過程においていかなる影響を及ぼしているのかを把握し，それに対処する必要性がある（大日向，1991)。②親のことをもっぱら子どもの発達を支え，促進する存在として捉えるのではなく，親としての行動－感情－思考システム，親になるプロセス（氏家，1996）や母親としての成長（青木，2003；汐見，2004）などといったように親としての発達をとらえる必要性がある。③社会・文化の中に組みこまれている対人関係の一つとして親子関係を捉え，主体と主体の衝突，調和といった関係発達論（鯨岡，1999）の立場で，そのパラドックスを解明する必要性がある。

このような親に関する発達的研究は，親の養育態度を説明し予測する新たな観点として期待できる。母親の親となる発達的変化が養育態度の規定要因として位置づけられるかぎり，親としての発達過程に注目していくこと自体が子育

ての現状改善にもつながると思われる。そこで次に，親としての発達を検討している研究を紹介する。

山口（2004）は，母親の親になる発達的変化をとらえた研究は数少ないことを指摘し，幼児期の母親を対象に養育態度の規定要因に関する研究を行った。その結果，母親の養育態度が過去の母親の体験に関わっていることを実証し，今後の母親の養育態度のありようを示唆した。また，栗川（2004）は，子ども関連ストレスと，自己の強さならびに柔軟さとの間に正の有意な相関がみられたことから，子ども関連ストレスが高まるとそれが母親関連ストレスを高め，親としての柔軟さ，自己の強さの発達を妨げるというプロセスを提案した。井上・湯澤（2002）の研究でみられるように，母親の発達に母子間の関係性が大きく関連しているといえる。

また，柏木・若松（1994）は，生涯発達的視点から親を研究する試みとして「親となる」ことによってどのような人格的，社会的な行動や態度に変化が生じたかを回想してもらい，就学前の幼児をもつ父親と母親346組を対象として比較検討した。そして，「親となる」ことによる発達は柔軟性，自己抑制，視野の広がり，自己の強さ，生き甲斐など多岐にわたるが，いずれの面でも父親より母親において著しく発達することを見出した。一方，小野寺（2003）は，妊娠７－８ヶ月から親になって３年間の間に自己概念がどのように変化するかに関して縦断研究を行った結果，「活動性」「情緒不安定」「神経質」という気質的な側面である自己概念は比較的安定していることが明らかになった。

さらに，親となる発達的変化の中でも子どもに対する主観的解釈や意味づけ（井上，2004）を越え，親である自分自身のことに視点を置いたアイデンティティの変化に関する研究が近年注目を集めている。多様化する親としてのアイデンティティの解明は，生涯発達的視点において家族関係，家庭内問題とのかかわりを示唆している。岡本（2002）も述べているように，養育態度に影響する様々な規定因の中でも，個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティのバランスと統合に焦点を合わせることによって，関係性の発達を検討することができると考えられる。

岡本（1996）は，３歳から５歳の子どもをもつ147名の母親を対象に，母親のアイデンティティを統合型（個としてのアイデンティティとの統合），伝統的母親型，未熟型の３つに分け，分析を行った。主要な結果は以下の通りである。①統合型の母親は，未熟型の母親よりも家庭生活によく満足しており，伝統的母親型の母親よりも夫からよく理解・受容されていると認知していた。②家族とのかかわり方や家族の認知の仕方は，統合型が夫を最も肯定的に受けとめており，家族に対する積極的関与が最もよくできていた。未熟型は，夫と子どもに対して拒否的であったり，積極的な関与が不十分である者が最も多かった。これらの結果を総合して，夫との肯定的な関係や家族に対する積極的関与は，個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの統合を支えるものであることが示唆された。

また，Markus and Wurf（1987）は，個人のアイデンティティと自己概念に関した個人の意味づけはストレスを和らげ，役割遂行に影響を及ぼすことを明らかにしている。それぞれのアイデンティティを重みづけたりバランスを保つ過程を明らかにするとともに，その過程にかかわることにより，母親や個人として自己実現の可能性を伸ばすとともにストレスを減少させることは子育て支援の今後の取り組みとして期待できると思われる。

３）育児不安と育児ストレス

親として発達する中で育児に対して効力感を持つことができれば子育てにおいてそれほど大きな問題は生じないであろう。ところが最近は，子育てに不安はつきものといわれるほど，親の育児意識における一つの特徴として育児不安や育児ストレスがあげられ，育児に悪影響を与えていると見られている。たとえば，親の不安状態が子どもへの親和的態度を形成する要因であることが明らかとなり，育児不安が養育態度，子ども観と密接に関連していることが示唆されている（藤本・小堀・鈴木・鎌倉・糸井，2003）。

吉川（2003）の研究では，育児不安の指標として「しつけの自信」をとりあげ，養育態度との関連を調べた。その結果，①幼児をもつ親の子どもへのかかわり方に関する養育態度として「統制的かかわり」「受容的かかわり」「基本的生活習慣の自立性を尊重するかかわり」の3つの因子が抽出された。②統制的かかわりについては，親の性別としつけの自信の有無について交互作用がみられ，しつけに自信のない母親が

最も統制的かかわりをとっていることが示された。③受容的かかわり及び基本的生活習慣の自立性を尊重するかかわりの2因子については，どちらもしつけに自信のある方がないより高く，父親より母親の方が高いという結果が示された。また，清水（2003）は，育児に対する価値や母親としてのあり方などを表す育児信念と育児ストレスの関連を明確にするために調査を行った。その結果「子育ては自分にとって価値がある」という信念が変わると考えている母親ほど，「育児への苦手意識」，「夫の育児態度に対する不満」が低い傾向がみられた。

さらに，Oyserman, Bybee, Mowbray and Kahng（2004）では，育児における親の自己理解が3つの要因，すなわち効力感，負担感，個人的成長としての育児感によるということが示された。また，これらの要因と養護性，育児スタイル，育児ストレスとの関連を調べた結果，養護性は親の育児効力感と正の関係を示し，育児効力感をもち育児を個人的成長として捉える親は，より受容的養育態度を示し育児ストレスも少ないことが明らかになった。

以上のような知見から，今日の子育て不安・子育て支援を考えると，櫻谷（2004）が指摘しているように，子育ての負担の軽減を図ると同時に親の育ちを支え，育児への自信の回復につながるような支援が不可欠である。

3．親の子育て認知

以上，子どもの発達に影響する親の養育態度とその規定要因について概観した。親が子どもを育てる際にとる態度や行動は，以前考えられていたほど一方向的に子どもの発達に影響を及ぼさない。子どもから親に向けての影響もあり，さらに菅野（2001）の研究で親の不快感情は母子間のズレによって引き起こされるというように，両者の行動には親子双方の認知が介在する。とはいうものの，子育てがうまくいくかどうかを決めている要因の中で，最も直接的で影響力があると考えられる。

これまでみてきたように，養育態度の規定要因には，子ども観，育児観，親意識，親としての発達，育児不安や育児ストレスなど，様々のものがある。しかし，各々の親がどのような経験をもとに育児観を形成するのか，日々の具体的な育児行動やそれに伴う自分の認知や感情をどのようにとらえているのかということは，子育て支援を考えるうえで重要であると考えられるにもかかわらず，現在のところほとんど明らかにされていない。このような親の認知は養育態度の規定要因として働いているだけでなく，他の規定要因に比べ親自身がコントロールしやすく，さらに他者もその援助を行いやすいと考えられる。したがって今後は，親の育児に関する認知，更には親がどう認知しているかを自ら判断するという観点から子育て支援を考えていく必要があるであろう。

これまで，育て方や育児行為などの認知や省察に関する研究の多くは，家庭内の親ではなく，保育所や幼稚園などの保育者をその対象にしてきた。保育者研究における省察の特徴をあげてみると，第一に，時代の変遷とともに保育ニーズの多様化が進む一方，保育のあり方，専門性が問われる中で始められたこと（宮内，1998），第二に，保育日誌の記録後，職員間のカンファレンスを通して子どもの成長を振り返ること（安見・秋田・鳥井・小林・寺田，1997），第三に，子どもの行動の意味を探るとともに，内面を探求し理解しようとすること（高橋，1998）がある。しかし，省察ということばは，多用されてきたにもかかわらず，曖昧な認識の中で研究者によって異なった解釈がなされてきた（吉村・吉岡・尾形・田代，1996）。

上記のような，保育者自身の意識の変化をもたらし得る省察，自分自身の行動や感情の変化に気づく心的活動は，認知心理学でメタ認知（Flavell，1979）と呼ばれている概念と類似している。これまで，子どもや育児に対する考え方，親意識を調べた研究は，家庭をとりまく環境の影響あるいは現代社会的問題との因果関係を示してきたが，育児における認知過程，またそれ自体に関してモニタリングを行ったり，知識を制御するメタ認知へ視野を広げていくことは，親の内面の深いところまで迫っていく可能性を与えてくれるであろう。

保育者は第二の親とも呼ばれるが，親の省察に関する研究では，認知心理学におけるメタ認知やモニタリングなどの概念が用いられ，主に臨床心理学で扱われてきた。たとえば，窪田（2002）は，カウンセラーとの会話の語用論的ビデオ分析によって，母親のメタ認知が促進され母娘関係が改善されたと報告している。親が自分のことを見つめ，自分の内面に耳を傾ける姿勢は，親自身だけでなく子どもとの関係も改善したと考えられる。また，子どもが親に示す行動を親自身がどのように認知しているかに気

づくことは，育児に望ましい変化をもたらすと考えられる。

以前は統制できないと思っていた感情や自分の思考過程をメタ認知という概念によりコントロールの対象としたのが，思考や感情のモニタリングに関する研究である。特に，ストレスや不安，怒り等の精神的苦痛を自分自身でコントロールできるといったアプローチは，精神的悩みを抱えている人々に革新的な認知療法になると考えられている。実際，Wells（2000）は，感情的な乱れや悩みとメタ認知との関係を論じたうえ，革新的な認知療法を提唱している。以上のように，自分自身の認知へ注意を払うことは，保育者の成長や質的向上，子どもへの理解の改善につながるだけでなく，親子関係の改善やストレス，悩みなどの精神的苦痛のコントロールにつながるということが示唆されつつある。

親が育児中，何らかの状況や問題を負担に思ったり，ストレスや不安を感じることは，状況や問題自体に対するその人の受け入れ方による（舟越・植村・榮・小川・野口・三浦・松村，2002）。さらに，子育てにおける葛藤は，母親の育児への振り返りや自分自身の行動－思考－感情の調整，自己の経験としての統合など，母親としての適応を促進するきっかけになっていると考えられる（井上，2003）。坂上（2003）は，2歳児の母親25人に半構造化面接を行い，子どもの反抗や自己主張の本格化に対する母親の適応過程を検討した。その結果，子どもが反抗期を迎えた時の母親の中心的経験とは，互いの理解や視点の調整・修正であったと結論付けた。また，小嶋（2004）の研究でも見られるように母親たちが自分の子育てについてどのように認知し，評価をしているかは子育て支援において重要である。そして，この研究の対象者の80％が，現状改善のために「自分の気持ちのもち方」を変えることで改善をはかろうとしていた（小嶋，2005）。このように親も自分の気持ちを察し，気持ちの変化をコントロールする方法を必要としている。したがって，子育てにおける親の認知の働きを調べ，その改善方法を検討することは，子育て支援における新たな研究課題となると考えられる。

一方，出産や育児経験の主観的側面における親自らの意味づけ（徳田，2004）や親の内省的態度，省察とも混用されているメタ認知に関しては，愛着に関する研究からの蓄積もあり，子どものときの愛着形成における違いは親のメタ認知の質によることが明らかにされている（Main，1991）。つまり，親のメタ認知的能力がなく自分自身の考えに関する表象的特性の理解に欠けていると，子どもと安定的な愛着関係を築きにくいというのである。そして，この理論的枠組みに臨床的価値を加えようとしたのがFonagy（1996）の研究である。彼は成人愛着インタビュー（AAI；Adult Attachment Interview）を通して，自分自身はもちろん他人の内的状態に関する内省的注意力（Self-reflective Observation）を探ることによって，Main（1991）のいう親のメタ認知によって乳幼児の安定感が正しく予測できることを証明した。

このような研究は，従来あまり取りあげられてこなかった育児態度の質の違いを生む認知的なものとして，親がメタ認知的モニタリングによって適切な育児を求めていく姿を描き出せる点において意義があると考えられる。しかし，親のメタ認知に関する先行研究のほとんどが精神分析や臨床的研究に基づいていることもあり，リフレクションとメタ認知が混用されていて系統的な定義づけが不十分である。今後の課題としては，これらの概念を整理するため，面接の分析結果や親のメタ認知に関する知見をもとに調査を行い，関連する内的要因を把握する必要がある。

本稿では，子育て研究に関して親の養育態度から認知的な領域までレビューを行った。ここでいうメタ認知的視点については，今後さらなる検討が必要であるが，子育てにおいて何をどのように支援するのかという問題を考える際の新たな視点になるだろう。神田・山本（2001）は，子育て支援事業参加者と非参加者の比較から，乳幼児をもつ親の地域子育て支援センターのあり方に対する意識調査を行っている。その結果，参加者群は支援要求が強く，支援センターへの満足度は高いにもかかわらず，支援センターとの関わりを持った後でも，子育て感での育児不安やイライラ感は解消されないことが明らかとなった。このことは，現在の子育て支援活動に疑問を投げかけると同時に，場を作るだけではなく支援の内容を吟味する必要があることを示唆している。その一つとして，親たちが受身的になりがちだった子育て支援策を見直し，親自らの認知を重視した子育て支援のあり方を考える必要があり，そこでは，親が自らの態度，感情，行為や言葉がけを大切にしながら，

主体的に自分をコントロールしていくことが極めて重要になるであろう。

＜引用文献＞

青木紀久代（2003）．母親としての成長を考える　児童心理, 57 (14), 11-16.

Flavell, J.H. (1979). Metacognition and cognitive monitoring : A new area of cognitive－developmental inquiry. *American Psychologist*, **34**, 906-911.

Fonagy, P. (1996). The significance of the development of metacognitive control over mental representations in parenting and infant development. *Journal of Clinical Psychoanalysis*, **5** (1), 61-10.

Grant, A. M. (2003). The Impact of life coaching on goal attainment, metacognition and mental health. *Social Behavior and Personality*, **31** (3), 253-264.

堀口美智子（2005）．5歳児をもつ夫婦の養育態度と夫婦関係　日本保育学会第58回発表論文集, 712-713.

Holden, G. W. (1983). Avoiding conflict : Mothers as tacticians in the supermarket. *Child Development*, **54**, 233-240.

古市真智子（2002）．幼児期における母親に対する認知－母親の自己認知とのズレ－　保育学研究, **40** (1), 54-61.

冬木春子（2000）．乳幼児をもつ母親の育児ストレスとその関連要因－母親の属性及びソーシャルサポートとの関連において－　現代の社会病理, **15**, 39-56.

舟越和代・植村裕子・榮玲子・小川佳代・野口純子・三浦浩美・松村恵子（2002）．3歳児をもつ母親の育児ストレスにおける対処行動　母性看護, **33**, 37-39.

藤本昌樹・小堀友子・鈴木国威・鎌倉利光・糸井尚子（2003）．母親の不安と養育態度，子ども観に関する共分散構造モデル　小児保健研究, **62** (3), 359-364.

藤田敦・丸野俊一（1992）．親の叱りことばの受容過程における子どもの状況認知の役割　九州大学教育学部紀要, **37** (2), 133-142.

猪野郁子・髙橋巧・寺津千賀・星野泉（2000）．幼児をもつ両親の養育態度　島根大学教育学部紀要（人文・社会科学），**34**, 55-59.

井上芳世子（2004）母子の発達に及ぼす関係性の役割に関する一考察－反抗期の母子関係を中心に－　広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, **53**, 237－240.

井上芳世子（2003）母親としての発達に関する研究の展望－葛藤場面に注目して－　広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, **52**, 227-230.

井上芳世子・湯澤正通（2002）．夫・子どもとの関係，対人関係が母親としての成長に及ぼす影響　心理学研究, **73** (5), 431-463.

岩堂美智子・吉田洋子（2004）．子育て支援活動における「親対象プログラム」の検討－都市の子育て支援に求められるもの－　日本保育学会第57回発表論文集, 212-213.

柏木恵子・若松素子（1994）．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み　発達心理学研究, **5** (1), 72-83.

神田直子・山本理絵（2001）．乳幼児を持つ親の，地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究－子育て支援事業参加者と非参加者の比較から－　保育学研究, **39** (2), 80-86.

神田直子・村山祐一・渡邊保博・吉田弘道（2005）．親および保育施設・保育者双方からみた「子育て支援」－「保育・子育て意識全国調査」をふまえて－　日本保育学会第58回発表論文集, 12-13.

菅野幸恵（2001）．母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ　発達心理学研究, **12** (1), 12-23.

小松孝至（1999）．児童の社会的特性に関する自己認知と母親による認知の差異－母子関係の特徴との関連の検討－　教育心理学研究, **47**, 49-58.

小嶋玲子（2004）．母親は自分の子育てをどのように認識しているのか　日本保育学会第57回大会発表論文集, 786-787.

小嶋玲子（2005）．子育ての現状改善のために母親は何ができると考えているのか　日本保育学会第58回発表論文集, 206-207.

衣田多恵・岡野雅子（2005）．母親の養護性と幼児の自己制御機能との関連（第２報）－場面画に対する子どもの反応を手がかりとして－　日本保育学会第58回発表論文集, 708-709.

窪田庸子（2002）．母親のメタ認知促進による母娘関係の改善　金沢大学大学院社会環境研究, **7**, 47-57.

宮内佳緒里（1998）．省察過程における保育者の意識について 日本保育学会第50回大会発表論文集, 604-605.

栗川裕江（2004）．幼児の母親における育児ストレスと親発達との関連　安田女子大学大学院文学研究科紀要, **9** (27), 207-215.

Main, M. (1991). Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment : Findings and directions for future research. Attachment Across the Lifecycle, Routledge.

Markus H. & Wurf E. (1987). The dynamic self-concept : A social psychological perspective. *Annual Review Psychology*, **38**, 299-337

松田君彦・児島晃代（2003）．親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究（1）　鹿児島大学教育学部研究紀要, **54**, 187-203.

牧野暢男・中原由里子（1990）．子育てにともなう親の意識の形成と変容－調査研究－家庭教育研究所紀要, **12**, 11-19.

森下正康・木村あゆみ（2004）．母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **14**, 123-131.

永山真理恵・金光義弘（1999）．子どもによる親の叱り言葉の受けとめ方－子どもが認知する親の養育態度における比較を通して－比較文化研究, **43**, 47-54.

中台佐喜子・金山元春（2004）．母親の養育態度が幼児の社会的スキルに及ぼす影響　家庭教育研究所紀要, **26**, 61-66.

中村真弓（2005）．地域の子育て支援活動と母親の生活意識　日本保育学会第58回発表論文集, 202-203.

中山まきこ（1992）．妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識－子どもを‘授かる’‘つくる’意識を中心に－　発達心理学研究, **3** (2), 50-57.

西村正子・高橋由起子・高田純子・桑田弘美・香川由美子・西海ひとみ（2000）．育児不安－無職の母親とストレス解消法－　岐阜大学医療技術短期大学部, **7**, 67-74.

小高恵（1994）．親子間の認知構造の因子分析的研究 心理学研究, **65** (2), 95-102.

岡本祐子（1996）．育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, **47** (9), 849-860.

岡本祐子（2002）．アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房.

岡野雅子・衣田多恵（2005）．母親の養護性と幼児の自己制御機能との関連（第1報）－母親への質問紙調査による検討－　日本保育学会第58回発表論文集, 706-707.

小野寺敦子（2003）．親になることによる自己概念の変化　発達心理学研究, **14** (2), 180-190.

大日向雅美（1991）．親としての発達　児童心理学の進歩, **30**, 153-179.

太田光洋・古田倭文男（2002）．育児サークルに参加する母親の養育態度　旭川大学女子短期大学部紀要, **32**, 9-19.

Oyserman D., Bybee D., Mowbray C., & Kahng S. K. (2004). Parenting self-construals of mothers with a serious mental illness:efficacy, burden, and personal growth. *Journal of Applied Social Psychology*, **34** (12), 2503-2523.

尾崎康子（2002）．幼児に対する母親と父親の養育態度－親意識とパーソナリティ要因からの検討－ 家庭教育研究所紀要, **24**, 40-46.

坂上裕子（2003）．歩行開始期における母子の共発達：子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討　発達心理学研究, **14** (3), 257-271.

櫻谷真理子（2004）．今日の子育て不安・子育て支援を考える－乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて－　立命館人間科学研究, **7**, 75-86.

猿渡知子（2004）．母親による育児支援サービスの利用に関する諸要因　家庭教育研究所紀要, 26, 14-26.

Schaefer, E. S., Bell, R. Q. & Bayley, N. (1959). Development of a maternal behavior : Research instrument. *The Journal of Genetic Psychology*, **95**, 83-104.

嶋崎政男（2003）．対応に苦慮する親へのかかわり－親の養育態度の四つの型－　月刊学校教育相談, **17** (5), 56-60.

進藤聡彦（1998）．適切なルールの適用促進のための教授ストラテジー　日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 152.

汐見稔幸（2004）．子育て不安，育児ストレスをかかえる親をどう受けとめる？どう支え

る？　保育の友, **52** (10), 22-29.
清水嘉子（2003）．母親の育児に対する信念と育児ストレスの関係　小児保健研究, **62** (5), 558-568.
杉山喜美恵（2005）．子育て支援イベントの現状と問題点　日本保育学会第58回発表論文集, 210-211.
Symonds, P. M. (1937). Some basic concepts in parent-child relationships. American Journal of Psychology, **50**, 195-206.
田淵創（1993）．母親の養育態度に影響を及ぼす要因の検討　川崎医療福祉学会誌, **3** (2), 35-45.
高橋勝子（1998）．保育の場における保育臨床性と発達援助のあり方を探る　日本保育学会第51回大会発表論文集, 578-579.
照沼晃子・藤井和枝（2005）．子育て支援に対する母親のニーズ－母親の本音と要望－　日本保育学会第58回発表論文集, 462-463.
戸田まり（1996）．養育行動　青柳肇・杉山憲司（編）パーソナリティ形成の心理学, 118-132.
徳田治子（2004）．ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から　発達心理学研究, **15** (1), 13-26.
津守真・稲毛教子（1958）．乳児の精神発達に及ぼす育児態度の影響　教育心理学研究, **5** (4), 14-24.
津守真・稲毛教子（1960）．幼児の依存性に関する研究－依存性と親の養育態度および従順性の相互関連について－　教育心理学研究, **7** (4), 16-26.
上田琢哉（1996）．自己受容概念の再検討－自己評価の低い人の‘上手なあきらめ’として－　心理学研究, **67**, 327-332.
氏家達夫（1996）．親になるプロセス　金子書房.
Williams, J. R. & Scott, R. B. (1953). Growth and development of negro infants Ⅳ Mother development and its relationship to child rearing practices in two groups of negro infants. *Child Development*, **24**, 103-122.
Wells, A. (2000). Emotional disorders & metacognition. Chichiester : Wiley.
安見克夫・秋田喜代美・鳥井亜紀子・小林美樹・寺田清美（1997）．1年間の保育記録の省察過程（1）　日本保育学会第50回大会発表論文集, 280-281.
山口求（2004）．幼児期の親子関係に関する研究－母親の養育態度の規定要因を探る－　児童教育研究, **13**, 119-128.
吉村香・吉岡晶子・尾形節子・田代和美（1996）．保育者の成長における実践と省察　日本保育学会第49回大会発表論文集, 112-113.
吉川昌子（2003）．幼児をもつ父親と母親の養育態度と育児不安との関連　中村学園研究紀要, **35**, 47-57.

謝　辞

本論文の草稿段階で，広島大学大学院教育学研究科井上芳世子氏から貴重なコメントをいただきました。記して感謝申し上げます。